

主 論 文 要 旨

論文提出者氏名：戸邊 友揮

専攻分野：神経精神科学

指導教授：古茶 大樹

主論文の題目：

Analysis of Actual Situations and Risk Factors for Early
Detection of Child Abuse in a General Hospital in Japan

(日本の総合病院における児童虐待の早期発見のための実態および
リスクファクター分析)

共著者：

Kumiko Ando, Shota Matsunaga, Lyrica Shimizu, Hiroki Kocha

緒言

被虐待は生涯にわたり影響を与え続けるトラウマ体験である。それゆえ、早期に発見し必要な介入につなげることが重要となる。しかし、日本では医療機関からの虐待通告は全虐待通報のうちの2%に過ぎず、とくに総合病院においては児童虐待が見過ごされている現状が示唆されている。今回我々は、聖マリアンナ医科大学児童虐待防止委員会 (Marianna Child Abuse Prevention Committee : MCAP 委員会) に通報された事例についてレトロスペクティブに分析し、総合病院における虐待事例の実態を把握するとともに、早期発見のためのリスクファクターについて検討した。

方法・対象

2018年4月1日から2022年3月31日までの4年間に、聖マリアンナ医科大学病院の医療関係者からMCAP委員会に報告され、MCAP委員会が受理した2歳から18歳未満の通報事例209例のうち、組み入れ基準

を満たした 160 例を解析対象とした。調査項目は、A：被虐待児の特徴、B：養育者の特徴、C：虐待の特徴の 3 群に分け、合計 120 項目の情報を対象者の診療録から抽出した。

解析については、虐待認定の有無（虐待群／非虐待群）を従属変数としたロジスティック回帰分析を行い、各独立変数について、虐待群と非虐待群を比較したオッズ比（OR）を 95%信頼区間（CI）で算出した。さらには、虐待の種類ごとの特徴を明らかにするため、同手法により当該虐待の有無を従属変数としたロジスティック回帰分析を行い、各独立変数について、虐待群の OR を 95%CI で算出した。有意水準はすべて 5%とした。

なお、本研究は聖マリアンナ医科大学生命倫理委員会（承認 5820 号）の承認を得たものである。

結果

本研究対象となった通報事例 160 例（男性 46.3%、女性 53.8%）のうち、119 例（男性：47.9%、女性：52.1%）を虐待あり（虐待群）、41 例（男性：41.5%、女性：58.5%）を虐待なし（非虐待群）と判定した。通報事例のうち約 4 分の 1 が虐待の偽陽性ケースであった。虐待群となる OR（95%CI）は、過去に虐待歴のある者は虐待歴のない者に比べて 5.12（1.93-13.62）、兄弟関係に問題のある者は問題のない者に比べて 29.06（2.82-299.39）、養育者との分離を経験した者はそうでない者に比べて 3.09（1.05-9.14）であった。他方、虐待群となる OR は、受診時に重度の身体的外傷が認められた者は外傷がなかった者に比べて 0.13（0.03-0.54）であった。

虐待の種類別の分析については、身体的虐待では兄弟関係に問題のある者は問題のない者と比較して OR が 8.06（2.14-30.27）、養育者との分離を経験した者は経験していない者に比べて OR が 2.94（1.13-7.65）であったが、外傷の程度が重い場合は外傷がない者と比較して OR は 0.22（0.05-0.90）となった。心理的虐待では男児に比べ女児の OR が 3.17（1.10-9.11）、過去に虐待歴のある者はない者に比べて OR が

4. 14(1. 32-13. 03)、身体疾患と精神疾患を併存している者は、身体疾患のみの者に比べて OR は 27. 08 (3. 01-243. 38)、ASD 傾向のある者は、ASD 傾向のない者に比べて OR は 4. 74 (1. 10-20. 39) であった。ネグレクトでは過去に虐待歴のある者はない者に比べて OR が 10. 31(3. 14-33. 81)、兄弟関係の問題がある者は問題がない者に比べて 9. 61 (1. 83-50. 43) であった。

考察

総合病院内における虐待事例の通告の実態と早期発見のためのリスクファクターを分析した。院内で虐待が疑われる事例を通報できるシステムは優れている一方で、4分の1の事例は偽陽性であった。虐待の通報は医療者—患者関係を悪化させ、当該患者の治療の妨げになる可能性もあり、通報の精度をあげていく必要がある。本研究では虐待に関連する要因として、虐待歴があることや、兄弟関係の問題や養育者との分離体験がリスクファクターとなることを見出し、家族関係の丁寧な聴取が虐待の早期発見にあたり重要な視点となりうることを明らかにした。

虐待の種類別の分析では、各虐待によりリスクファクターが異なっていた。身体的虐待の場合、外傷の程度が重いことはむしろ虐待の発生を否定する結果となっていたことから、外傷の重症度だけを重視しすぎることは誤った判断につながる可能性が示唆された。心理的虐待は通常言語能力の高い女兒の方が自ら訴えやすいが、本研究においても臨床的知見と合致する結果が得られた。一方で、対象児に精神疾患や発達障害がある事例で高いオッズ比が確認されたことから、とくに精神疾患や発達障害が疑われる事例では、医療者側が心理面にも積極的に介入していく必要がある。ネグレクトのリスクファクターについては、虐待歴や兄弟関係の問題が関係しており、いずれも既存の研究と合致する結果であり、児童の診察においては、家族全体に視野を広げてアセスメントしていく姿勢が重要であることが示唆された。

結論

児童虐待は早期に発見し介入につなげる必要があるが、誤った虐待の認定は養育者と医療者の関係を悪化させ、患児の治療の妨げになるという繊細な側面もある。本研究で見出された総合病院における虐待のリスクファクターは、医療者がより正確かつ早期に児童虐待を発見するための一助となることが期待される。